

7月4日(金)に今年度第1回会員交流セミナーが開催されました。

今回のセミナーでは、芝浦工業大学名誉教授であり、長年にわたり環境共生住宅の研究開発に携わってこられた三井所清典氏より「持続する社会のためのすまいづくり・まちづくり」というテーマでご講演いただきました。

会場は、大和ハウス工業(株)様のご厚意により、東京支社2階の大会議室をご提供いただき、併せて、大和ハウス工業(株) 技術本部 環境部 部長 玉田真人様より「地球温暖化防止に向けた取組み」についてもご紹介いただきました。

また、今回は、大会議室をご提供いただけたことから、参加人数の制限を設けず、できる限り大勢の方々に参加いただけるような試みも実施しました。



日時：平成20年7月4日(金) 15:00 ~ 17:45
会場：大和ハウス工業(株) 東京支社 201 会議室
参加者数：83名

■持続する社会のためのすまいづくり・まちづくり

三井所氏の講演は、ご自身のこれまでの活動に沿って
有田のまちづくり

五箇山・旧上平村の克雪タウン

南会津・旧館岩村でのすまい・集落づくり

中越・旧山古志村の復興住宅づくり

地域の一般建築への貢献

という5つのテーマで構成されていました。いずれも、地域に根ざしその地域にどっぷりと浸かり、時間と労力を惜しまずに係わってこられた活動ですが、そのすべては、「建築が長持ちする、ということは、技術がつながっている、ということであり、それは技術を持った人がつながっている」という、三井所氏の言葉に集約されているように感じました。



有田のまちづくり

有田のまちづくりについては、陶磁の里という伝統産業都市の建築とまちなみ形成をめざすために、風景との調和や有田の焼き物、職人の気質に学んだことについてお話をされました。

昭和50年代は“外の世界”を知っている人たちが地方の街を壊すような風潮があったため、それを防ぎ、有田という地域に入り込んでいくために、地域の人々との信頼関係を結ぶことを何よりも大切にされた、ということです。東京の設計事務所が地方へ進出して仕事をするのではなく、「その地域に住み、生活を営むメンバーが、まちづくりの一環として一つひとつの設計をすることで、その積み重ねが有田の地域活動のモデルとなる時がくる」ということを信じ、丁寧に、そして長期的な視点にたって活動を行った結果、受け入れられていったということでした。

1984年から始まったHOPE計画に有田も参加したときにも、まず町を説得するところからスタートし、さらに地元的设计者や工務店に声をかけて集め、見学会や勉強会で「有田らしい建築」を模索するなど、粘り強い活動を続けたとのことでした。このグループは1987年以降も「有田HOPE研究会」として活動を継続しているとのことでした。

五箇山・旧上平村の克雪タウン

豪雪地帯であるこの地域では、高齢の女性たちによる屋根の雪下ろしの大変さから、昭和30年代ごろから合掌を外してモダンな2階に寄せ換えることが流行し、その結果昔から続いてきた風景が変わってきてしまいました。

そうした背景をふまえ、ここでは「克雪」をテーマに、屋根の雪下ろしが不要な自然落雪の技術開発を行ったということです。また地域住民のみんなが見ることができ、そのために普及効果が高いということから、様々な実験が行われ、その結果、5寸勾配でムクリのついた屋根が開発されま

した。(自然落雪のために、棟もいろいろな種類が開発されました。)

材料や形態は新しいものとはいえ、合掌をイメージしたシンメトリー(左右対称)な形や、縁側・吹き抜けなど地域の生活を意識したデザインや空間づくりにも充分配慮した、ということです。

南会津・旧館岩村のすまい・集落づくり

この地域では、冬期に外気が-15~20にまでなるのに対して「暖かいすまいづくり」がテーマとなりました。

そのために、大工・村民とのすまいづくり研究会を立ち上げ、1年をかけて自然落雪や高断熱・高气密などの性能についてじっくり勉強し、その後2年目から地元の大工による協働建設が始められたそうです。また、外の世界を知るために、大工たちが富山など“先進地”を視察し、帰ってからは村民に報告会も行ったそうです。

興味深いのは、地元の中学生が現地を見学し学習する仕組みを構築したことです。これにより次の世代を担う若い方たちが、住まいをつくる職人と住まいそのものに対する関心を高め、理解するのに役立っているということでした。

中学生に着目するという、地域に落とされた種が芽を出し花を咲かせ広がっていくような、中学生本人にとってもその地域にとっても活性させられるとてもよいヒントがそこにあるように思いました。

旧山古志村の復興住宅づくり

この復興住宅は

山古志らしい住まい

雪と上手に付き合う住まい

地域循環型の住まい

コスト負担を軽減する住まい

安全で快適に長く住み続けられる住まい

の5つの基本方針を元に計画が作られました。

特に、大工とのワークショップを通じて、将来も地域の大き工がメンテナンスしていける点、将来増改築ができる“未完成”の住宅とする点などを重要視したとのこと。これにより、早急な住まいの再建に応えらるとともに、震災後も地域の大き工の生業(なりわい)が継続できるためです。

山古志らしい住まいとしては、この地域に多い「中門造り」というL字形の間取りで、この外観を継承し風景に馴染むモデルが考えられました。間口4間、奥行き4間とし、2階からも陽光が降り注ぐ吹き抜けもつくり、3mの積雪にも対応できるよう軒高も設定されました。

土台を除く構造材、造作材の全てが地元の越後杉ということ。外壁の下見板張りもこの越後杉ですが、これによって将来にわたり材料が容易に入手でき、傷んだ部分だけを補修できることで、住まいも含めた景観を継承できることが意図されたのです。

地域の一般建築への貢献

各地域で培ってきたノウハウを一般建築にも活用した事例がいくつか紹介されました。いずれも地域の大き工にとって仕事になるチャンスを生み出せる設計、発注の大切さを明確に打ち出したプロジェクトでした。

これらの活動を通じて、三井所氏の言う“持続する地域社会のための”という言葉が示す意味は、『生業の生態系を保全する』ということであり、建築に携わる様々な業種、業態が連携しシェアすることで各々生き残る道を確認することがよくわかりました。

“地域に根ざす”“地域らしい”というのは簡単に言葉として言われることですが、真にそれを実現し具体化していくためには、膨大な時間と手間を惜しまずにかけ続ける不断の努力と強い思いが必要不可欠であることを、深く認識することができた講演だったと思います。



大和ハウス工業(株)の地球温暖化防止に向けた取組み

最初に大和ハウス工業における環境ビジョン、大和ハウスグループにおける中期環境行動計画、環境活動重点テーマ、環境行動計画 2005 の成果などが紹介されました。

続いて、環境行動計画 2010 の基本方針として4つのテーマが示されました。その中で、「地球温暖化防止」は最重要テーマとして位置づけられ、大和ハウスではCO2 バランスからCO2 ダブルスコア（排出量1に対して削減量を2とする）こと等が定められました。

この目標を実現していくためのひとつの方策として、省エネ型賞品の開発・普及が掲げられており、その具体的な内容として xevo（ジーヴォ）の性能やスペック等が紹介されました。

また自然環境と調和したまちづくりの取組みとして「越谷レイクタウン」の内容が紹介されました。特に、街全体として風のシ

ミュレーションを行い、その結果に基づいて街や家の中の風の流れを活かす工夫が施されている点が興味深いものでした。



大和ハウス工業としては、CO²削減のために、既存物件も含めた環境配慮技術の一層の開発・普及と自然エネルギーの積極的活用といったハード面の対策を行うと共に、限りあるエネルギーを上手に使った豊かな生活のあり方といったソフト面についても重要視し、ユーザーに提案していくことが必要だと考えているとのことでした。

またそのためには、インセンティブと市場での評価の仕組みの確立が必要不可欠なこととして指摘されていました。

